

# 岐阜 見聞録

## がん闘病、一人じやない

で開かれるのは今回で2回目となる。会場には、参加者がそれぞれの思いを記した灯籠がともされ、がんとの闘いや共生をたたえ合う。

がんを患う方、克服した方、支える家族、医療関係者らが夜通し歩くことで、生きる喜びを分かち合う「リレー・フォー・ライフ」というイベントが10月13、14の両日に岐阜市内で開かれる。関係者の方々による「命をつなぐリレー」の準備が進んでいる。

がんの告知を受けたことがある「サバイバー」が集まり、自らの経験を共有し、希望を見いだすこのイベントが岐阜

自らがサバイバーでもある岐阜実行委員会の横山光恒事務局長(43)は、「がんは悲しいばかりではない。希望がある。地域のイベントとして定着させたい」と語り、リレーの参加チームの募集や関係者との調整に取り組む。

横山さんは、右腕の肉腫を見出し、現在は経過観察中だ。

2005年に脇の下のしこりに気付き、がんの診断を受け、絶望感にさいなまれた。抗がん剤で肉体も精神もまいつてしまつた。妻子を抱え、職を失つた。

インターネットで見つけた「リレー・フォー・ライフ」の担当者にメールしたところ

「大丈夫ですか」という心やさしい電話がかかってきた。自分は一人ではないと泣いた。

抗がん剤の副作用で100kgも歩けない状態だったが、2006年に茨城県で開かれた日本

生きざまをみせたい」と語る。思いはさまざま。私は父をがんで失つた。同居していたわけでもないので大きなことはいえないが、人生とは何かを考えた。啓発活動としてもリレーの意義は大きい。

リレーは岐阜大学も協力してくれ、医学部附属病院で約500人が参加する見込みだ。寄付金も集められ、がんの研究助成に充てられる。

で初めてのリレーに参加した。仲間がいることを地元の方々にも分かつてもらいたいと、思い立つた。

### ■ 命をつなぐリレー

横山さんは「子どもたちに生きざまをみせたい」と語る。思いはさまざま。私は父をがんで失つた。同居していたわけでもないので大きなことはいえないが、人生とは何かを考えた。啓発活動としてもリレーの意義は大きい。

リレーは岐阜大学も協力してくれ、医学部附属病院で約500人が参加する見込みだ。寄付金も集められ、がんの研究助成に充てられる。

**満野龍太郎**(みつの・りゅうたろう) 共同通信岐阜支局長。社会部、経済部などで勤務。経済部の記者、デスクとして食料問題、金融、自動車産業などを担当した。静岡県出身、48歳。連絡先はmitsuno.ryutaro@kyodonews.jp

「このほど赴任しました。岐阜のことをたくさん勉強したいと思っています。よろしく、お願ひ致します」。

毎月第4週の水曜日に掲載します。